

再発見・牛久第十二話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

小川(芋銭)家系譜⑤

佐々木・木村・小川

木村長門守重成(常陸介重茲の子)①

―重成は大坂城の―

豊臣秀頼に召し出される―

常陸介重茲が切腹

する前に重成は生まれる

―佐々木家の分家

六角家の義郷のもとで成長―

木村常陸介重茲は、関白豊臣秀次事件に連座したとされて文禄4年(1595年)7月、豊臣秀吉に切腹を命じられた。

重成は、同年の7月以前に父重茲が城主だった山城国(現京都府)の淀古城内で呱呱の声を上げていた。重茲切腹後、重成は母の里・近江国蒲生郡馬淵(現滋賀県蒲生郡)あたりでひっそり暮らしていた。5歳のとき、佐々木宗家の秀義の曾孫にあたる泰綱が興した六角家(京の六角堂に屋敷を構えたことから六角と称した)の当

主義郷に引き取られる。一説に、義郷は秀次と竹馬の友で、ここで重成は実子のように育てられた。14、5で元服して、19歳を迎えるまでの間に、兵法と武芸十八般(弓・馬・槍・剣外)を修め、広才博識の武人になっていた。

風雲急を告げる

大坂城の豊臣秀頼に召し出される

―真田幸村・長宗我部盛親・後

藤基次・木村重成は秀頼四天王―

重成が19歳を迎えるまでの間には時勢の大きな変化があった。

慶長3年(1598年)に豊臣秀吉

が62歳で伏見城において没し、その2年後の関ヶ原の戦いで、石田三成(西軍)に徳川家康(東軍)が大勝して、家康に後陽成天皇より征夷大將軍宣旨がくだって政権・江戸幕府が開かれた。

一方の豊臣家では、秀吉の遺子秀頼が60余万石の大坂城主という一大名に凋落していた。

秀頼の大坂城を攻撃するために

家康は大義名分を立てた。

慶長19年(1614年)7月、家康

は、幕府儒官第1号の林羅山に命じて、完成して間もない方広寺(京の東山)梵鐘の鐘銘『国家安康』『家康』を分断していると糾弾させた。

大坂城は風雲急を告げた。

関ヶ原の合戦によつて30万人余が浪人となっていた。その浪人たちは、槍一本をもつて、一国一城の主になることを夢見、あるいは主取りの絶好の機会と見て取った。

大坂城の兵員召し抱えのうわさ

を聞いて駆け付けた浪人は、12、3万に達したという。

後藤又兵衛基次は、黒田孝高・

長政親子に仕えた豪勇の士であったが、長政に謀叛の疑いをかけられて浪人していたが、秀頼が兵を募るのに応じて大坂城に馳せ参じた(夏の陣で討死にする)。

真田幸村は、父昌幸とともに関

ヶ原の役で三成の西軍に属した。そのため兄の信之が家康に昌幸・幸村父子の助命を乞い、許されて父子は九度山に隠棲していた。昌幸はこの

九度山で没し、幸村は同年10月9日に秀頼の懇請を受け、徳川方の監視網を潜り抜けて大坂城に入城した(夏の陣で討死にする)。

長宗我部盛親は、土佐国の浦戸城

(現高知市)主で22万石を領する大名であった。関ヶ原の役では石田三成に誘われ、飾りの総大将毛利輝元とともに南宮山麓に陣を張つたが、西軍の敗色濃厚と見て戦わずして帰国した。井伊直政を通じて家康に詫び入るが領国を没収され、浪人となつて上洛、相国寺門前の竹林に庵を結び、村童に手習いなどを教えていた。大坂冬の陣が始まると、甲冑をまとい出立、旧家臣たち(千駄)がいつのまにか武装して寄り添い、旧主従諸共大坂城に入城した(盛親は夏の陣で、大坂城落城とともに脱出したが、のちに蜂須賀の家中の者に捕らえられ、三条河原で斬首の刑に処せられた)。

木村重成の場合、それより2、3年前に秀頼より直直に召し出され大坂城に入城しており、長門守と称していた。



淀古城跡(現在は妙教寺山門)。淀古城は現在の京都府京都市伏見区納所北城堀にあった。重成は文禄4年(1595年)に父重茲が城主だった淀古城内で生まれている。
【写真】京都市文化芸術企画課より提供